# 不可視の広場

「公共性」を創出する「空間の幅」

指導教員　吉松秀樹教授　印

1BEB2124 若月 優希

## 1.「公共性とは何か」

ヨーロッパの街を旅した時に見た、人々が集う魅力的な広場たち。(Fig. 1)そこで感じたのは日本との違いだった。日本の街には、このような誰もが自由に使える場所は少ない。広場(Fig. 2)、公園、図書館、ビルのエントランスホール…いわゆる「公共空間」が本当に「公共」として機能しているのか、そもそも「公共」とは何なのか疑問に思った。

Fig.1 生活の一部になっている西洋の広場

Fig.2 開かれていない日本の広場

## 2.「明確なものは無い」

ヨーロッパにおける広場は「パブリックスペース」と呼ばれる公共的な空間であり、「プライベートスペース」である家は外から遮断され両者は明確に分けられている。(Fig.3)それに対して日本では、「パブリック・プライベート」は生活の中において人の行為で常に変化するものであり、明確に分けて考えてこなかったといえる。(Fig.4)

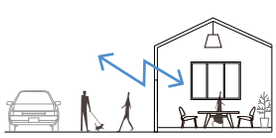


Fig.3 扉で閉ざされている西洋の家

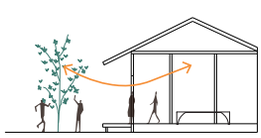
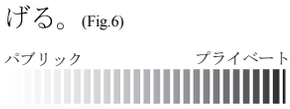


Fig.4 緩やかに共有する日本の家

## 3.「不可視の広場」

日本には「パブリック・プライベート」の対比ではない、「もう１つの空間」があるのではないだろうか。それは、人々が集まることによって作り出される「誰のものでもない」曖昧な場所であり、両者を緩やかにつなげる「幅」持っている。(Fig.5)下に例をあげる。(Fig.6)




「幅」
① 横方面の広さ。細長く続くもの。
② ゆとり、余裕、余地

Fig.5 空間が持つ「幅」

例：
店先、庭先、縁側、東屋、空所の空き地、アーケード商店街…

Fig.6「幅」を持つ空間の例

この空間は、その場所にいる人々の行為と関係し、パブリック性もプライベート性も持つ。これはヨーロッパとは異なる目に見えない「不可視の広場」であり、日本における「公共性」のあり方につながるのではないだろうか。

## 4.「空間に幅を持たせる」

「公共性」＝「人の集まり」を創出するために、平面的な広さ、屋根の高さ、開口の大きさなどの「目に見える幅」を段階的に変化させる操作によって、人々の関係性、行為の量と範囲などの「目に見えない幅」をつくっていく。(Fig.7)

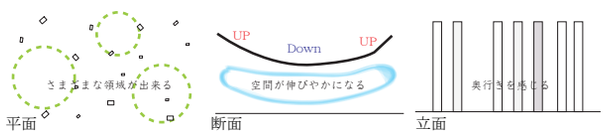



Fig.7 目に見えない「幅」をつくり出す空間構成モデル

ある程度広い共有の場所と、休息をとるなどの行為も受け入れられる私的な場所の混ざり合いが「人を集める空 間」をつくる。(Fig.8)

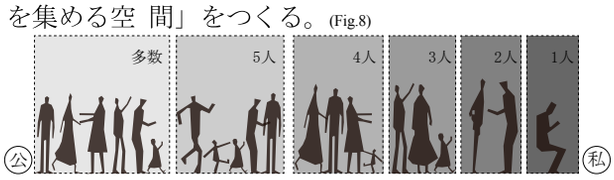



Fig.8 共有の場所と私的な場所の混ざり合い

## 5.「街に開いた小さな公共空間」

空間構成モデルを用いて、大学駅前におけるイベントスペース兼、ブックカフェの設計に応用する。普段は頻繁に人が行き交う場所だが、日常の生活の延長線状になる「幅」を持たせることで境が曖昧になり、人が集まる「不可視の広場」が生まれるきっかけになるのではないか。(Fig. 9) (Fig. 10) (Fig. 11)

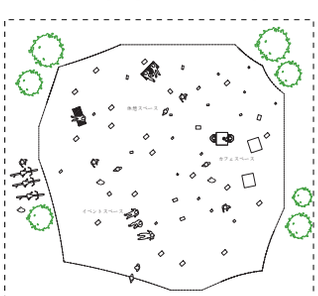


Fig. 9 Plan

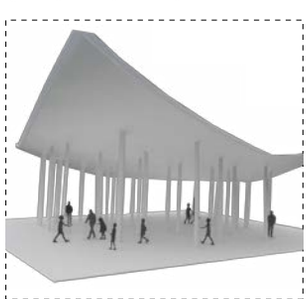


Fig. 10 Photo A

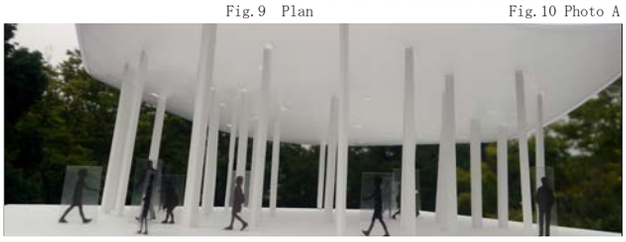


Fig. 11 Photo B